仏教史論考

砂の城

——古代中国廃仏史・北朝篇——

古川卓也

一　荊の道

北斉の都鄴において、文宣帝の勅命で北魏・東魏の国史編纂を撰述従事した史官魏収が著わした『魏書』釈老志によると、古代中国における廃仏の嵐は、仏教徒斬殺など当り前のごとく行使され凄絶きわまりないものであったらしい。日本における明治の廃仏毀釈も無惨きわまりないものではあったが、いわゆる中国仏教史に残る三武一宗の法難と呼ばれる仏教弾圧は、規模も大きくかなり様相も異って念入りの虐待だったようである。「魏書釈老志」では、その内の北魏太武帝の廃仏を克明に書き残している。太平真君七年（四四六）三月の廃仏令を中心にその動向を記す。第一回目の法難である。

自今以後、敢有事胡神、及造形像泥人銅人者、門誅。雖言胡神、問今胡人、共云無有。皆是前世漢人、無賴子弟、劉元真・呂伯彊之徒。乞胡之誕言、用老荘之虚仮、附而益之。皆非真実。至使玉法廃而不行。蓋大姦之魁也。有非常之人、然後能行非常之事。非朕孰能去此歴代之偽物。有司宣告征鎮諸軍・刺史、諸有仏図形像及胡経、尽皆撃破焚焼、沙門無少長悉坑之。

「今から以後、あえて胡神に事えるもの、及び泥や銅の仏像を造るものは一門を誅する。胡神（仏）というけれども、今の胡人に問うに何れもあることなしといっている。皆是れ前代の漢人無頼の子弟である劉元真や呂伯彊の徒が、乞食の胡人（仏若しくは西域僧）のほらっぱちをうけついで、老荘の虚仮の説をもって附会し増益したものである。まったく真実ではない。王者の法をして廃して行なわざるに至らしめた。蓋し大姦物の首魁である。非常の人あって然る後に非常の事を行ない得るものである。朕に非ずして、たれかよくこの歴代の偽物（仏教）を除去し得ようや。有司は征鎮諸軍や諸州の刺史に、あらゆる寺も仏像も及び胡経（仏典）も尽く皆たたきつぶし焼いてしまい、けとして絶えず主謀者たちが暗躍するものである。

いま北魏においてはどうであったか。北魏の世祖太武帝も即位当初は仏教政策を施してはいたが、やがて側近の宰相崔浩の